

は、その據るところを異にする點に在るので、水經注の記事を動かすべからざるものとするか、道里記やこの殘卷に重きを置くかによりて導かれる結果に外ならぬ。此等の城鎮についてのこの殘卷の記事が道里記に合するところ多き爲に、或はこの殘卷は道里記に據つたに過ぎぬと見る人があるかも知れないが、然も殘卷の記事は遙かに道里記よりも詳密に及んで居ることは兩者を比較すれば直ちに看取せられることで、その詳密はこの書の地方的地志としての性質に由ると認めらるゝ以上、直接兩書の間の本末の關係を認むる譯には行くまい。然るにも拘はらずこの問題に關してかく兩書の一致を見るとすれば、少くとも唐代に於て廣くこの考が行はれて居つたことは争ふを得ない。一方水經注の記事は釋氏西域記に據つたものであるが、普通に釋道安の著と認めらるゝこの書にどこまでの信賴を繋げ得るかは、僅にその一部分だけが諸書に引用せられて殘存するに過ぎない今日の情態に於ては、可なり困難な問題である。魏書の西域傳に他書と同じく「鄯善國都扞泥城」と記し、釋氏西域記のやうに伊循（脩）城に都すと書いてゐないのは、たゞ前史を踏襲したに過ぎないからだと見る藤田博士¹⁵の説は一應尤もであり、かゝる例は決して少くはないが、それだからというて、他に一として同様の記事を有しない釋氏西域記の説を確固動かすべからざるものと見るべき理由もない。水經注にも誤謬の少からぬことは言ふまでもないことで、乾隆三十九年紀昫¹⁶等が永樂大典についてこれを排綴した時にも、「至塞外羣流、江南諸派、道元足跡皆所未經」というて、附會乖錯を指摘した。この問題については、更に博く史料を搜求して、決定を他日に期せねばならぬ。

伊循・伊脩の何れが正しきかについては、藤田博士¹⁷の説の通りで、これも今俄かに定め難い、たゞこの殘卷に「脩」と書いてあるのが「脩」であることは第17行に就いて見れば明らかであることを注意して置きたい。